様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　２ 年　６ 月 １９ 日現在

機関番号：１４４０３
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2015～2019
課題番号：１５Ｋ０２６０１

研究課題名（和文）英語中間構文と同族目的語構文におけるASPPの統一的分析

研究課題名（英文）A Unified Analysis of ASPP in the English Middle and the Cognate Object Construction

研究代表者

松本　マスミ（Matsumoto, Masumi）

大阪教育大学・教育学部・教授

研究者番号：１０２０９６５３

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,300,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、英語中間構文と同族目的語構文（以下、CO構文）のアスペクト的特性を比較し、両者における統語範疇ASPP(Aspectual Phrase)の統一的説明を試みた。結論として、完結的な出来事を述べる動詞句を内蔵する中間構文のASPPと結果読みのCO構文のASPPは共通のASPPであることを示した。また、動的性質、完結性、持続性が両構文を比較するのに有効なアスペクト的性質であることを示した。さらに、CO構文の特性について包括的なデータ収集を行い、整理した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究の学術的意義は、英語中間構文とCO構文における構造に起因する意味を統語部門で分析することにより、反語彙主義を擁護すると同時に、動詞句周辺の構造研究が重要テーマの一つである生成文法や併合をヒトの重要な能力とする生物言語学的取り組みにも貢献することができた点である。また、整理したCO構文のデータは、今後の研究に広く利用することができる。さらに、日英語の自他交替の研究である本研究は、自動詞と他動詞という観点から英語教育にも応用することができる。

研究成果の概要（英文）：We have compared the aspectual properties of the English middle construction and the English congnate object (CO) construction and reached the conclusion that the ASPP in the middle with the telic VP phrase and the ASPP in the CO construction with the result meaning are the same syntactic category. We have also shown that dynamic property, telicity, duration of the event are significant when we compare the two constructions. We have also collected the comprehensive data of the CO construction and analyzed them before we compare the two constructions.

研究分野：英語学、言語学

キーワード：Aspectual Phrase　英語中間構文　英語同族目的語構文　Voice Phrase　動的　完結的　持続的　生成文法

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

１．研究開始当初の背景

（１）反語彙主義と三層分裂動詞句

「反語彙主義」とは藤田・松本(2005)などにおける用語で，語は語彙部門で形成されるという立場を「語彙主義」，動詞などの語も統語部門で形成されるという立場を「反語彙主義」と呼ぶ．研究代表者が一翼を担う三層分裂動詞句の研究は，これまで中間構文や能格文の主要な分析方法の一つとして認められてきた.平成26年度日本英語学会でも研究代表者が提案したシンポジウム「動詞句とその周辺をめぐって—機能範疇と語彙範疇の役割」が開かれた.

（２）中間構文についての研究

研究代表者は，Matsumoto and Fujita (1995)や藤田・松本 (2005)の研究をふまえて，反語彙主義の立場から，(i)の三層分裂動詞句という基本構造を用いて，(iia)の中間構文の特性を(iib)のような構造により説明している.

(i)　... [VP1 Agent V1 [VP2 Causer V2 [VP3 V3 ...

(ii) a. This vase breaks easily.　b. ... [VoiceP　Voice [VP1 *pro* V1 [VP2 V2 [VP3　NP V3...

また，基盤研究(B)（平成18年度～20年度）（分担）では，認知言語学の視点も取り入れた中間構文の研究を行い，基盤研究(C)（平成23年度～25年度）（代表）では，英語中間構文を起点とする日英自他交替の研究を行った.　2013年には態の専門家であるAlexiadouシュツットガルト大教授を招いて中間構文についての国際ワークショップを主催し，通言語的に中間構文を捉えた.

（３）同族目的語構文(CO構文)についての研究経緯

Matsumoto (1996)，松本(2007)などでは，非能格性から(iiia)のCO構文を捉え，CO構文には出来事読みと結果読みがあり，２つの解釈は異なる２つの構造に起因することを提案した.また，日本語の「ひとCO」との比較を行い，その後の日本におけるCO構文の統語的分析の基盤となった.

(iii) a. Mary danced a merry dance.　b. Mary danced merrily.

（４）両構文におけるASPP

研究代表者は，両構文の分析において機能範疇ASPを想定した．中間構文では，限定性条件や含意的使役者を説明するためにTenny (1987)などを参考にASPPを含む動詞句構造を提案した．CO構文では，非能格動詞がCOを取る場合はASPPが生じることをBorer (1994)を参考に提案した.

（５）両構文におけるASPPの統合の必要性と近年の動向

研究代表者が提案した両構文におけるASPPの間には整合性があるとは言えなかった.中間構文では，特別な場合にアスペクト的要素であるASPPが生じると想定した．一方，CO構文の場合は，(iiib)の非能格動詞の場合はASPPが生じないが，CO構文ではASPPは必ず現れる.

近年のASPPの研究にはASPPが動詞句の外側にあるとするBorer (2005)(2013)の他に，動詞句の間にASPPを想定したTravis (2010)があり，Pylkkänen(2008)ではVoiceやApplicativeという他の機能範疇を含む動詞句構造が提案されている．さらに，中間構文については，従来のフランス語，ドイツ語，オランダ語に加え，Alexiadou and Doron (2012)ではギリシア語，ヘブライ語の「態」も含めた通言語的分析も提案されている．一方CO構文も，英語とヘブライ語を出発点に屈折語尾を持つ言語とCO構文との関係が通言語的に議論されている.以上の経緯から，英語中間構文とCO構文の構造を精緻化し，そこに現れるASPPの統一的分析を通言語的視点も入れて提案するという今回の研究テーマに至った.

２．研究の目的

本研究は，生成文法における反語彙主義に立脚して英語の中間構文と同族目的語構文（CO 構文）における動詞句とその周辺の構造を解明することにより，統語構造と意味，統語構造と事象構造との関係を探求することを目的とする．具体的には，両構文における機能範疇 ASPP の統一的分析を試みることにより，アスペクト，非対格性，名詞句の指示性，格付与のメカニズムを検討し，反語彙主義の基盤となる三層分裂動詞句構造をさらに精緻化する．その際，心理動詞構文，非能格構文や非目的語削除構文などの関連構文について考察し，通言語的視点により多角的で説明力あるモデルの構築を目指す．

英語中間構文と同族目的語構文における構造に起因する意味を統語部門で分析することにより，反語彙主義を擁護すると同時に，動詞句周辺の構造研究が重要テーマの一つである精鋭文法や併合をヒトの重要な能力とする生物言語学的取り組みに貢献することができる．

３．研究の方法

本研究では,英語中間構文と同族目的語構文の ASPP と三層分裂動詞句を含む動詞句とその周辺の構造を反語彙主義の立場から明らかにする．具体的には，これまでの研究代表者の両構文における研究の中で浮上した問題について，特に，アスペクト，非対格性，出来事構造，格付与, 指示性, 目的語削除などの点から解決する．そのため, 両構文の研究を同時進行で行うが,毎年関連のある課題を設定し，両構文の研究成果を照合することにより説得力のある動詞句周辺の構造を提案する．また最新の文献を調査するとともに，語彙主義による先行研究のデータも活用する．さらに，国内外の生成文法，動詞句の研究者と研究交流を行い，様々な角度からの知見を得る．国内外の学会や研究会に積極的に参加し，最新の動向を把握し，研究成果を発表する．

４．研究成果

（１)英語中間構文と CO 構文のデータを包括的に利用して両構文のアスペクト特性と構造を比較し，両者における統語範疇 ASPP(Aspectual Phrase)の統一的な説明を試みた．その結果，完結的な出来事を述べる動詞句を内蔵する中間構文の ASPP と結果読みの CO 構文の ASPP が共通の ASPP であることを，松本(2020)で示すことができた．

（２）drive のように，対応する能動態構文に完結性がないにもかかわらず容認可能な中間構文を作る動詞の場合，その中間構文は表現されない動作主の読みが強く，主語の特徴が出来事の成否に大きな役割を果たすという，中間構文としての特徴を強く持っている．そのために,視点アスペクトである外部 ASPP(OASPP)(Travis (2010)など)が投射され，総称演算子のスコープは ASPP となる．それに連動して，完結性がないにもかかわらず，内部 ASPP の投射が可能となり，その結果中間構文として容認されるということを示すことができた（松本(2020)).

（３)中間構文と CO 構文の比較に有効なアスペクト的特性は動的／状態的,完結的／非完結的,持続性であるとし，両者におけるその３つのアスペクト的特性を比較し，共通点と相違点を比較した．二つの構文の共通点は，両者とも持続的な解釈が可能であるという点である．一方,両者は状態性や完結性においては対照的である．この両者の相違点は，他動性における自動詞化，他動詞化という逆方向の変化とともに三層分裂動詞句を発展させて説明することができるのではないかという方向性を示した（松本(2019)).

（４）先行研究における CO 構文のデータを，動詞の特性，CO の特性，様々な構文における CO構文, CO 構文の意味特性, CO 構文と比較される構文という５つの観点からあらためて包括的に整理した（松本(2017a)）．本成果と松本(2013)による中間構文についての包括的なデータを比較することにより,（１）～（３）の成果の基盤とすることができた．また，この整理されたデータは,他の研究者が今後 CO 構文を分析する際に活用することができる基礎データとして位置づけることができる．

（５）中間構文には無生物主語が多いが，無生物主語との関連から，植物を表す表現について研究を行った（松本(2017b))．生物学的に見た「植物」の特性についての基本文献を参考にし,ヒトと植物を扱った文学作品からのデータを検討した結果，植物が生物であるにもかかわらず無生物のように扱われるのはなぜかという問題について，ヒトと植物の生物学的・言語学的特徴付けとして，植物は意志，感情がなく，移動，発話も行わない特徴から，無生物のように扱われるという結論に至った．この結論は，心理動詞の主語を動作主と解釈するかそれとも原因と解釈するかという研究につながると期待できる．

（６)通言語的研究として,日本語における SAPP(Miyagawa (2017)),ペルシア語の differential object (Karimi(2017)),ギリシア語とヘブライ語の同族目的語(Horrocks and Stavrou (2010))の研究をデータ分析の参考とした．

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計3件（うち査読付論文　0件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　3件）

１．著者名 松本マスミ	４．巻 ６５号
２．論文標題 英語中間構文と英語同族目的語構文におけるASPPの統一的分析－外部ASPPと内部ASPP－	５．発行年 2020年
３．雑誌名 大阪教育大学英文学会誌	６．最初と最後の頁 45-52
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 松本マスミ	４．巻 ６４号
２．論文標題 英語中間構文と英語同族目的語構文の比較に関する覚書	５．発行年 2019年
３．雑誌名 大阪教育大学英文学会誌	６．最初と最後の頁 101-105
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 松本マスミ	４．巻 ６２号
２．論文標題 データから見た英語同族目的語構文の特性	５．発行年 2017年
３．雑誌名 大阪教育大学英文学会誌	６．最初と最後の頁 113-132
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計3件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

１．発表者名 松本マスミ
２．発表標題 A Unified Analysis of ASPP in the English Middle and the Cognate Object Construction: Outer ASPP and Inner ASPP
３．学会等名 OKU-U of Arizona Linguistic Colloquium
４．発表年 2019年

１．発表者名
松本マスミ

２．発表標題
植物と言語表現ー生物学的見地の導入ー

３．学会等名
日本英文学会北海道支部第64回大会

４．発表年
2019年

１．発表者名
松本マスミ

２．発表標題
植物とヒトとことばー言語学と生物学の接点-

３．学会等名
第4回付属学校園教員と大学教員との研究交流会

４．発表年
2016年

〔図書〕　計2件

１．著者名
松本マスミ（責任訳）

２．出版社
開拓社

３．書名
節のタイプと発話力、そして発話の内容

４．発行年
2020年

５．総ページ数
378

１．著者名
松本マスミ(共著)

２．出版社
開拓社

３．書名
「植物、ヒト、ことば」『＜不思議＞に満ちた世界』

４．発行年
2017年

５．総ページ数
５１７

〔産業財産権〕

〔その他〕

大阪教育大学教員総覧
http://kenkyu-web.bur.osaka-kyoiku.ac.jp/scripts/websearch/

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考